



新式和歌  
用之部

歌

伊地知文庫  
文庫20  
211  
3





文庫20  
211  
3

歌



宗收教書ノ部本

伊地知氏書冊

伊地知氏書冊

連歌集之次第

伊地知氏書冊

教句ハ人々ノハ親睦也〜脇は子のこ  
たらしこをたのむは志のこひく脇を他と  
に入居〜等之ハ智身ノこしく他故を結  
ハ独之と下心斗付也〜白安とるく  
下事〜口白目ハ天祚の所代也〜  
極り万有のこひく深く事〜ねまの  
ちらハ白目も如病〜しり他〜美信  
筆ノハ字〜如也



發句の事

發句の百韻の長も短も、  
をきくは、  
中よ、  
幽玄の姿、  
く、  
あ、  
は、  
よ、

池田景喜、  
物、  
は、  
く、  
發句の法、  
發句の法、  
可仏

今日、  
く、  
く、  
と、  
と、







郭へたに保よ名宗山路水

小野宗臣也して壬午

菫城はさし何とほしより一葉ふる

らり音城時雨よわくらひぬる

は友白の報恩のこころこころ

まはして花言のほくも香のぬ 報書

花の枝もかく成れば其本を

花一本植ぬま古の宿はぬし

小松生ひ花子ほら思ふわね

ふもさしぬ小草花咲河津花

はぬさしぬよふもさしぬわさのまじ

して花もさしぬさしぬとま

さしぬさしぬとて誠の大事の憶ふ

と身よりの思ふさしぬさしぬ

日影御新花よ白つる朝のま 心敬

此花白の伊勢太神宮にて法樂の

おもは河津のまきりさしぬ

神よさしぬ針祭白の侍のま



是より双魚取れし一是亦う正仲と云  
侍り

幾時すん花さきむ胡麻 同

是のゆきの姿も夢よりくたは

も中さく社信も是亦う當世に

しれ登白とてし

是より人ぬり言物うれき紫花 同

是まの網を勝く淋衣作織り

仙衣中意も海と是く行。

見ふくも名がら月花光のれ 心敬

こや野さしぬ鳥のこもさか

と花雪のこゆる老もゆし 寺須

咲か花理りまぬ花もわか

は花光のこゆる宿もゆし

二條実白は家よめて

夜もくめ月ハ泉流り夕すみ

為曇よ鏡か市り言れり夜



風中く花はしるは朝也

満廣

は春白去留くもぬく河津のなを  
くく後群よそくはの山田長つ  
春白の少又すれしは侍らんも  
卯の河津もそは類同持く是誰  
かくはしるもんはくもさむらひの  
おあはれつこくはくは侍らんも  
まこととあはれもさむらひの  
して分限とこはり只は法よ業

つより流るくはくは侍らんも  
よそくはの勢く邪路は入流る  
傍題く春白の事

月よまににたりぬ花の目曇りぬ  
此趣傍題くはくは侍らんも  
はくは侍らんもさむらひの  
春白の事

傍題く春白の事

春白の事







切らば中へはかたきこと程  
多し師説と違てすくなく地  
ふかふかといふはかたき  
ぬこぶよぶのぬこぶぬこぶ  
こそはしめりかたきといふ

發句は面よ切字ん原て切句  
あり名定大也一そと切  
切字ちくして仕立句と

かひと事多し他師説と

脇句は

眼句ハ三時言句よ遠く無し大  
し眼の看句よまといひてすく  
又對句よしとて看句は  
り悪し一強り極てなるす  
し然もつゝはさかひの事  
子規の眼の白三時のもく  
よて多し勢も示を



又かちのりも中よき一と云ふ事  
の極秘の秘を言ふに只(Baras)  
と云ふ事なり

第三の事

まことの腸より出て一と云ふ事  
一と云ふ事なりと云ふ事なり  
と云ふ事なりと云ふ事なり  
此具の体なりと云ふ事なり

下(白)の事

てらんとしてよと云ふ事

まよひて居て居る事  
大いなる事なり又文字として  
事なり極秘の秘なり  
ことばお事なりと云ふ事なり  
すことばの事なり

一句難の事

鹿を霧煙の月をくくして夜



えれ神すくは偽て八月雨て世逐  
信流とて操ひ侍り鶴真山よ悪しき  
此の年准化

一句病之事

花よ老野 卯花よ玉川 月よ文科

萩よ六城也 紅糸よ龍田 雨よ望

墨深よ夕ノ色 名のきよふ名き

かれよ侍り事 悪しき地よ花ハ

侍り事 此の准之志の馬よ文は

色よ早悪し 梅よ花ハ悪し 花よ梅

も侍り事 此但そハ侍り事

太ハ皆連歌の病ハ能く云々也

一句邪病之事

かほおぬくも田り 鹿の聲華志て

そハ侍り事 梅の侍り事 夜よ侍り事

乃白り侍り事 一句よ夜介那 梅の侍り

一句此越そハ邪病の白ハ云也

一句重詞之事



今朝の朝暮 嵐のう勢 時雨のぬ

昔より哥よして讀むるに  
初は木好むくしとくさるるを

何事しうらさしして難なるべし

年ふとよきを候の病の

うす農んくしとてんして

はりのよと成入るに月、れんて

ゆるくすし農を候の病の

しうしゆくしとてんして

要なる白紙十のち

冠不着と云候事

白紙紙の福の行ぬ

こゝとりの白紙紙の福の

冠不着と云候事

袴不着と云候事

浮ぬしはく紙よと云候事

其の申の七文字用はた原う

かた紙申しとてんして



然もそつたすかたうんはいつか  
社八重朝やあちうらあ  
お娘のきあのゆへ此道よらん業  
ハ能く業のわら

皆禪と云病と事

白露の玉々来して身はひか  
此白下の又文字を詠く海へ来して  
と急ぎしねさうさう可成

回意の白事

急ぎしねさうさう可成  
熊の子原太山の鳥青よらして  
けのの懸へ何となくあつた回意と  
宗柳は原松の  
し女子の眉はけくひよとれあふ  
お娘よらあつたあつた  
花とんねしりもさあつた  
奥山よ麓山はつたあつた  
松むらり尻よとつたあつた







まは面白なるものなり

心算の事

見下がる人の詞は花咲て

此趣末まはたしと館より行つた

末をよむ所の白紙志下り教るや

念ふこと難し

難白の事

善の事しは神候なり

この事しは神候なり

けあむは越いしはぬ白く洞の目

はしむる山屋はくさるは花の白物

ふれ何のふれ志しはたし葉は

字録の事

花よいしは月ひる内り峯は

ヶ根よ身よはなるは信時と若

か〜原假令

あいの 月あな 名あ

花の事しは 花の事しは 花の事しは











面白くてもあるあつて月には  
物も成る面白く

以上奉病句 以下頭句解

遠く面白

沖津舟昔日行も高きうへ  
の海へはさるの舟も  
かたよきかたよき舟も  
うへへ出よの城も面白く

あまのこころ面白く  
ゆへも頭句のうへへ持て

近く面白

きよしのまはた新場のさへ  
垢の浦もはるもへんて  
かたよきかたよき舟も  
うへへ出よの城も面白く

眺め面白



夜のまきよの明ゆく花はて  
入るるよふの月の山ありし

是は眺むの白となく京氣凡情  
眺むの幸や道なは似たりと  
かきつるちひの人の福の時の別  
有らぬく物も皆好むに付あ  
しるるよふの月の山ありし

控上歌後

昔より人よとなく花はて

雨は夜は月は文の松の歌

その場と城控て下りて用よま  
くちりり一白はぬ柳と福ん  
の身よ入るる花すら能く味と有  
るよ社

控後歌上

はらぬよよ老よのたよ夕花

是は夕花のいかに建てるる柳の枝よ  
岡もよとけりよ赤城もよ秘事も一



ひらけぬあひまきし

正し白

水の月なる終りふよ夜は海し

か極よ有のやしれよ有を家誠正は

白とふやうくくくち白よ付て死

西白れ地りして一白くかりて

かく西白く白くあつたてれ事ひり

は待れを初る時におとす路し

有文くよ有は家

高遠一富よあつたもん

そいぢれもれ有事く目よんを

の類よはまら白は有文のよ有は家

よは家

そ文のよ有は家

吹満され風と野かは夕よて

月の孰れまきこか人かたは

そい有物のやんねらひのよ有は家

共てまらぬのそ文の白くして西白は



白の心敬宗徳

有心の心

かたはれは海山の心

さびしき事なき心の心

何事も者なき心

りすまんとおの心

かたはれは心なき心

まじりて月周の心事

（十巻）

心の本を葉

心なき心

花より心なき心

音なき心

羽なき心

かたはれは心なき心

心なき心

射の心

かたはれは心なき心



松をわうむるそと松次て

如松は月夜のおく位回事から地

ちの姉をたたいのうさくさくさく

次登の音よ哥れ席中へ入置り

まゝのうら対しを射るうさく

ふと世に勝しめあつるうさく

うさくうさく

はらうさく

後宮に朝もはらうさく

位にわやれとよ音詰て

そははらうさくはらうさく

付て松は行れと射るさの音よ名れ

きん対ちしとんはらうさく

射るはらうさくはらうさく

世に勝しん地はなしとん対ち

とんはらうさくはらうさく

二うさく

ゆくらん本は葉の雨のそ中







山河の橋は丸木よちりて

後も前もこの歌いありて

子ハもつら物下りゝ親の身ハ寝て

こせむらりて林よけりて

かぬ野の古草ぬく花咲て

海にこゝろ月こゝろははこ

以歳に一日の心もなほ

七夜もていり物おひりきり

ハ重橋をくはしよなる

たはなははくも罪よちりて

砂々くひれ関谷井の水よ果て

のちりりととれ草の夕雲

ふく丹は足ぬ徳の地よけ

そよた類の同意とて同意よちりて

是歌の長きもていりて

能くすまのわ

よるはあはれ

かくはくし思ひこりて







一白は内は述懐及教を常

懐旧の句も一白の内は二色

結ぶの時こそ

結ぶ時こそ其の如くは

尺教の句も常計は用れは述懐と

尺教の結ぶ時述懐の句一白は

内は二色も尺教の句一白の内は

尺教の如くは其の如くは

結ぶ時述懐の句も一白の内は

わの結ぶ時述懐の句も一白の内は

述懐の句も一白の内は

懐の方の句も一白の内は

述懐の句も一白の内は

わの句も一白の内は

述懐の句も一白の内は

枕詞

其の句も一白の内は

わの句も一白の内は



二一  
鳥羽の夜  
玉鉾の夜  
女供の夜

隠題

村の夜は静か  
如松の顔  
舟の夜  
か

本亭の夜

鳥羽の夜  
は歌の吉野  
河原の夜  
は歌の吉野  
河原の夜  
は歌の吉野



今春もまた一々の世にありて  
よき世にありて  
けしきもよき世にありて  
まじりて  
合宿し  
嶽の事  
よす  
定後山  
交う

は歌ハ  
侍  
ちり  
新  
假令  
まの  
は本  
東



よふかしのうらみ

その哀傷の音は

くさくさ

物のこもる

こころを教和義は

此本哥よ

サキ月おはる

はるこころ

は秋のこころ

この歌よは秋の

歌に三白よ

あはれ若し

月よらむ

あはれこころ

さあ

とけり

よわあ

弱し







哥波川志より歌のたしむるに  
初めの際に只此のうらひ係りし  
則奇よあめぬ物よし

本説取らる事

ゆりしとあめぬ古き

家より柄紙朽しとあめぬ志くして  
此越中説く志しむ松の本説は  
内邦の書籍よりはくせんとしむ  
より分ちては軒廊可有事は

いひのうら強しす海よりあめぬ  
らと連歌の名人の上へ人破りあり  
物とまはし海してあめぬらんめ  
あめぬ白しとあめぬらんめ  
布と邪強しとあめぬらんめ  
花説の二白とあめぬらんめ

物説分らる事

後しむしとあめぬらんめ  
生駒山雲の海とあめぬらんめ



是は仔細物語の心を深重なるに  
平白に京氣よおしるの深き人  
しりして遠慮の事よけか  
みかぬ我の心は根よき事か  
いふれよさるんしりして又  
と嫌きよぬわの根の古事  
物語  
よのこんてよの心路よ  
あつらひにせよとの心  
連歌何しよわの事よ遠慮よ

とつり事よ次は物語の  
源氏の大筋の物語よ  
あつらひにせよとの心



高野斑山本紹巴教書後半

紙巴羅十二帖

陰ノ帖

うれも嬉しきれよ社あまき  
 紅葉せぬけし日わりの侍<sup>ツチ</sup>やして  
 禽獣草木の類もあつはすし  
 一しをあらわし引をてれあり  
 一し鮮うの取ぬしは捨つるは

陽ノ帖



はし法の末は教むし言  
待もせししよむを云控て

きこへ恨と云控ても心末  
ふひなりこのむしこ実わりの流  
白く我の流しを伝取すは陽の  
解しつるくし返る悪味懐衣傷  
ホは陽の袷肝要なり白くは陰  
陽の二つともくは若くは白くは社  
長きく解

車はしら白く焼くは

有るは云の上くきり文あり

その容顔は美条なりと御杯いふも  
衣冠正しく志て玉樓金殿もたを  
らるるはししこむしやた若くは  
白くは云ひなり

濃なる解

はし法の末は教むし言  
待もせししよむを云控て



右十に字は心より有為情變を記  
する事 誠よまき妙也

西白神

竹一村のつげきりといふ

夏は半宿して冬は厚く

皎潔なる井村之より夕櫻長守  
出多白也

一節と神

高きより下りていかに神ん

鳥羽玉の夜も白妙の夜よ

白妙の神は別よ 露なるしとある  
哥しせよ之誠一節を伴ふは

程神勝也社

尼ヶ谷の神

むらさき 露なるもよる聲

小田村霜夜の初日氣勝て

東風のあけて目新も女実よら  
こゝろよはとてきこし 田の西は田露



右十に字は心より有為情愛を記  
する事 誠よき如く

西白舩

竹一村のつげきよのじいさん

いさよや花小あかりの夕霞

皎潔なる井村のまよる夕霞は衣帯  
出さるる

一節を結

高きより下へいかにいかに

鳥居をたぬ夜も白舩の夜よ

白舩の神は別れの霧をたてしよめる

舟よせよ之誠は一節を結念は

程は勝も社

尾り松の神

むらさき色し 霧はあふむる聲

小田は霜夜の初日氣勝て

東風のあけして目新も紅葉はら

いさよはとてきこし 田の西は田霧



もつ病ふけは元々母鳴くは  
識し眼の前は社

表の解

一はのまゝに心はあり

鳥の音も老り夕は花とんあ

白祥傳更しは去る感物し

識しは重なる地より

存出の解

思ふ友の日にをすは家は

あすはさかちるは書はあはぬ

感物しはくは地ははるか

きけは人の心世のむし

孤神

せめては星は笑はるる

越はひぬはるはさの秋のそ

か日あはるはは旅は思ひ

しは侍のまはるかひは

はかすはくは侍の



感有旃

木の園の月を此月の夕  
けの丸下草小虫をく  
誠よ木のつら月のはのちり小雀  
さ終て草から終なる虫のかり  
けのめ終る丸京よよ志のこ  
して廻す迷わぬ一いちち  
はるあきしんかおの感んは  
かりしり

肝要旃

山路の雲のく人教をきん  
旅立一たのくまきん  
つめのよま雲のわりのんて旅を  
清いひつるん夜清く此旃  
はのあ合のうくんのあま  
はるはるああはるのあけ  
旃

秀逸旃



夜の明は一人さびしくしき

夜に独り浮きあぐさの音は

白牡丹の輪あつて心して誠は群衆に

心流神

物にふくむ若もやういふ

あふもいたる友にふみあふ

心の中を詞にあらわすこととすは

意とてえ侍り

平心之舞

智りの徒ぬ里にふり舞

こころも今年のことな花をんで

深も嬉しき常の心とてまは

舞も

正意舞

誰かあはれなきに男の情らん

こころもいふれにまはのみら

まはの玉にふりてうらみは舞も

神に授けせぬ舞誠は正意は舞



美意神

かりの森の毘道よまきつら山風

小糸うけし夢もまきつら山風

くまねぞく其こころあつらひ

式子田親王存の文のりそ森乃

おぼしと源一途ひ侍もや

流月神

流月しれあつら様の花の歌

舟出せはつすむ及や

心取神

こころし野と里のかり松

伊次おろしれかへしきれ夢

おはれ熟し子細く侍りさき

縁もつれし母別より心取やれた

ひ云出ぬ後懐取面もこころ

しつて村あきま地へ宗師の音

の歌あつらえ侍りも去

おぼしおぼしおぼしおぼし



うらとちり能く増く事なり

四日廿二日

身紙おとらるは鐘いするは

黒髪も今の商標の秋文て

わねよ手紙現金せしるはくは

白と性熱くくは白紙の四日廿二日

是ホハ九画のくくはくは

詞を法より解

きんも是くはくはの聲

東洋流のむきはの小萩福ひて

是ホハ前白紙とくは後文達の詞を法て

東の巻紙とくはきくは

埋ま対し解

正木交ぬくは炭の秋しせ

男麻白く和山の奥や附あらん

是ハ頃云の粉骨の白くは宗師終日吟

して味ひ深くくはくは誠

正とらるはくは正木教母のくは



奥山の村もはなやかにさくらさくら分  
も社

心留神

舟と秋とせよはもりのあはれ

驚鳴く尾籠のやの夕月夜

は白くくつら伝はるるにほのめ及

秋縁と神

柙や、勢ひまきて散る森

道中道のむらさきの小萩露深

萩の露に風を待とせしや、柳のも  
ほくもまじらひの若りも又萩の露  
くまの白くぬれ柳のうつくぬは  
るる

追音と神

森光くの東丁をたのむ神

古廻のくやまのつらぬ森

月のありはま借し通して古人の心  
る森光くくくくくくくくくく



めらりていひわらふ字は道高は  
とらふ

行巻

佛のまゝに書いとて  
教うらふ人の先主は  
はる有明の境界生信具  
十は解く他く先約り

写古之

音とらふはたう

三跡と七日は  
信はともか  
白とらふ

拉鬼

武士の軍は庭より  
あつらん  
いふ  
鬼  
社



不安の癖

ふいふくなくぬ嵐の松を  
うそ世に捨らんやよはるる  
堪ぬわづらひの癖と云出り返不安  
の癖と云く

隠題の癖

30  
幼くくちてしよの松古  
結ともしるくはる老の独奏  
伯牙絶弦世よふくくくく

琴の幸嶽独りよこし

金理の癖

くくくくくくくくく  
悪くくくくくくくくく  
その前のくくくくくく  
てけきくくくくくくく  
化意くくくくくくく

遠白の癖

くくくくくくくくく



あらまじやせいのま同んてあひる  
恋と衣傷迷懐まかろ次信れよま  
末の事おのり侍らん書白く白  
と云へ

取成る体

車もこのれ子取もいこら  
初名張大井の宿れ音れ日か  
兼白のこつれ車火宅のよれ  
牙も取の源氏ゆれ取の娘ま

母の文井よ任れれ取ら二歳か  
ておのゆまじつるれの上れま表  
よれれりありのり源氏取れ海ま  
娘よ母れあまみの取よ二車の  
佛子小糸合せれ事城ま奇州  
ちりまよれれれれ白く  
大事の物なるれ

巧まら体

そくまいあまはれあまきく表



照月のかげの鶴舟はしめて

いづれも驚くして周を待らん歌よて  
舟もさくらしくかねの舟不堪小あ  
學し必邪路よ入侍らん

年歌付し事

困なり若くもねるを望く  
せううねるは心のさひさ  
まの本歌のふとさくら入らねん  
下學し事

集し事し大表の代をくらめおて

學のあさかの大和しは葉

采女の歌は言は葉のひかりし  
しとらうし

引連し事し事

思ひてふよの人ねはるる

難もをなましとらう同も

は神を堪能の物もかねの名る  
ちも初んよて學は必邪路よ



くま

射矢く射

ふよれ雲のよまへて  
白妙のまねとふは  
射矢のまねとふは  
射矢のまねとふは  
射矢のまねとふは

京物く射

ふよれ雲のよまへて  
白妙のまねとふは  
射矢のまねとふは  
射矢のまねとふは  
射矢のまねとふは

かたはら  
ふよれ雲のよまへて  
白妙のまねとふは  
射矢のまねとふは  
射矢のまねとふは

吳物く射

此分のあとの  
鹿草の葉のよまへて



その能者の粉骨く初ん清學子の心  
此醉を杯をきし一息の  
以云けんん誠々邪強成意一か松  
よ前白よ呼出よ能熟すの自  
然の一息よ

尺詞と醉

去後通し秋は社あり

花の娘ま葉梅の紅葉

その花の白紙再び

下は

邪強神

春梅もむより里の庭

羨堂次内は月んん使もて

は白松と梅の雨霞のねと夢を

えして月と海んと迷行し

成もくも侍り幸一は誠々邪強

のましくわは海く社



こと

慶長貳年

二月廿七日

紙巴判

可思惟句解し書

儒釈道のこみけし得きり極り  
云出んは憚りなき事、至善なる事  
此れ定ぬる事、實言のつらみありて  
聖人の徳をいひし事、いひし事  
極りし事、一、新しき本、實をいひ  
るひ難きをいひても法の及み入るに  
んは、ち、事、世、道、こと、心、を、持、か  
ぬ、事、解、り、し、虚、無、自、然、の、理



五  
山  
不  
回  
者

此本者一子傳之秘也  
子金刀溪溪積氏  
他是有同浦者也

紹巴在判







楽天の詩の付よ似たりと云くのを  
そは終のふりこころを流ひるごとく  
佛方きふも昔紙鏡としてあつた  
流の社出よりいひも有りぬ當時の  
軍其相乙よ及らんや自償の白  
解の思惟て有るや

和歌の和生は凡俗として其徳の言  
き事 涉秀山の流しぬるや社  
ふ海の上とらふは増はらやめ

白静のありかりは 又た今集  
和歌のありはふりたりは 呼子鳥い  
をけせもこの和歌の流は流し  
らん人の遠慮に有る事 ちんん次は  
こころを流す人の流りたるは 縦  
うりし物知ぬは 毎夜は有る  
事を知しては 秘事として  
おぼしめし 是れ一の思惟

雪月花鳥 同 能世書紙して又月



花やもすぬるは折をわけては  
えれ郭云月言の連歌は心風雅  
余魂をりこもつ花のきこ人の信少童  
好七垣んこりひみかほく満つら  
きこ後かん後ハすぬし花言月言  
礼儀ハ此道の肝要之思惟あり  
但自然名白やや出月流ハ不可料

郭也

郭云の夢もむすく原いん出流い

きり辨言の山人なれよかき一余  
わてやも初言ハ海行ハ礼礼  
昔より云わハ一多後ハ堂下ハ解  
花言成無一言ハ時をよハはり  
多後ハ身証持ハも閑ハ礼ヤハ解  
よすりの不似合ちり人ハ草言鳥歌  
もこしハ志らり世後ハ其言ハ  
希て相應ハ礼ハ白解あり  
是思惟ハ人言專一也



月影籠る月海物園に夜よしの音  
雨物とせきんん白舩物くく次い  
かよ射すきんん月影さすやめ  
はらとて又くもくらの音はか  
と月影射すくかかかかか  
白舩もはらとくらの月影の音  
紙てくははは日影くらの刻  
月影く金魚の影思惟す  
花の音白くくお越すも極地様は

常の事く其亦音白舩も聲の  
りけくくきんんはのくあひくは  
音の明にのくは極白舩く其  
付足て極音も出まはら物なり  
然くは極の白舩も強揚よめあは  
月影の貴人好きの物なはらくは  
音の音くく誰よも思ひくは  
くはの音もくは音くははら  
只何れははすく射すかぬ極







いふは社志社記のうらた備一  
衣くの別は八又道よとの者り  
洞よははるは袖よのうらた備一  
魚は夜するあはるくは患の園路  
紙あはるは一白紙はきて社志の  
意もおろりあはるは夜するうらた備一  
衣はく同人もんと動ふあはるは  
あはるは紙色の詞つはあはるは  
よあはるはうらた備一のあはるは

社志社記のうらた備一  
物く唯は紙色のうらた備一  
そよの思惟の肝要はうらた備一  
海士推まはるは社志のうらた備一  
ホは備はるはうらた備一のうらた備一  
世は物く侍はるは月やと社志のうらた備一  
あはるはうらた備一のうらた備一  
えんあはるはうらた備一のうらた備一  
うらた備一のうらた備一のうらた備一







ね事一も侍ら只差ふにけい傳ま  
くく心月醉まのほるま  
文仕の袖は偶ふも世公くかくて  
やいんりま行来とくも教む累  
れ一不也此初の教ひ侍りく次  
於て老若僧俗の身よほるを自  
白も延意ありて他の白よい  
かゝ事一も有りし余いそは准て  
能思ひより情ねの福一も

あゝ如事誠求しん云茶一もかゝる  
社ね云強流の歌事一もては遊  
云々も只正流と歌一も方か  
れ流りや意と方と辨らりし  
大い云おれ白は姿一も人  
の心一もかゝる地もあはく  
は一も思惟ありん事一も  
いふもよせきよよい高れと交る  
すくくたるの熱別か松の事一も



こてはらうらららんかきききき  
思惟有念

神祇尺教祝言返若難忘なるの返  
白師祝と法すしていせぬ事なり  
然しおひつりも難の友白いそ身  
よあつていとい思惟ありん  
かしこ歳且も老のまといこ網四す  
きりぬ人の世ぬ事しきさふ紫の  
思惟と念

名残の花と白ひれを云事と花  
白面と二葉のうらよ時の宗匠  
水よえ香をけいし伊勢と群  
花よえと花葉の白出て宗匠  
花と花あり白ひの花といえなり  
思ひて巻頭を軸言月花腸  
三概筆際い一巻の肝要もてを切  
のしりおひつりも難の友白いそ身  
紫のお松の葉と好きて思ひつり







云出んか似合ざる物なり能く且惟有

念

宗。如。法。師。十。九。首。如。教。の。心。は。交。白

より十一句目と自伝の姿を此の

よみ浅く思へかち伝の事一と志

くひ求めて了る旨ありん事一と志し

趣向に千変万化行くにからりて

新。新。表。と。書。と。し。も。唯。白。の。心。の。輕。重。と。も。さ。し。も。あ。ん。為。く。た。ん。の。白

並のちくまといふもあつて分の

又存少めよあつた時いたる

白。心。の。心。と。く。に。は。あ。つ。た。心。の

せしむし一巻の内は二と白もあつた

白。心。の。心。の。誠。は。手。下。の。事。と。ん

う。且。は。席。の。具。と。從。一。眠。と。定。頂

なりしらすは懐身の花路をん

はくろひて席破色の也惟れ業

ありん



夢想の連歌と書時の爰とす念  
次左遷なるも心もくはく  
ちとくを詞にも思惟の有程具は  
日待たぬ此連歌の待月かいは  
く重なりあがりたも念もよそ  
す海も事く其申は是れ入  
て思惟有也

首途は福よき歌の行末とてまた  
のこすれははるる定ぬ歌の常  
馬よりあつてはるる川  
歳すちよの顔を林のうら  
余はるるして思惟の有

遊芸の連歌よの表傳ふと嫌  
もくは別をぬる後れあ  
念もくはあかはん又あ  
さひもあきくはるる  
細紙様も余は准して思惟有  
移流元服を帽子も禱念福



歌中「たゞしはき歌は」の持宗初十九  
哥はうらやめりう 乞はの心てを  
らん思惟めり

其して祝ひの連歌は離別西事

亦は白の出りも悔りて可なり  
秘玄なるしきありて好むる  
よのあつは能く弁つる一思  
法分ハ少も滞らるは懐帯は情  
して玄拂ハ心は長らるは出

為さし西事一法をいかに  
やも其西一法は心もさる  
あまハとて是れ西事一法求む  
よのあつは能く弁つる一思  
法分ハ少も滞らるは懐帯は情  
して玄拂ハ心は長らるは出  
よのあつは能く弁つる一思  
法分ハ少も滞らるは懐帯は情  
して玄拂ハ心は長らるは出  
よのあつは能く弁つる一思  
法分ハ少も滞らるは懐帯は情  
して玄拂ハ心は長らるは出







元禄七<sup>甲</sup>成七月吉日

<sup>本</sup>常陽

朱

<sup>小</sup>乙中雅文

子







